

女流作家論

— 奥野健男

小説は本質的に女性のものか



女流作家論

一九七四年六月二十日 | 初
版第一刷発行 ● 著者 | 奥野
健男 ● 発行者 | 山崎善智 ●
発行所 | 株式会社第三文明
社 | 東京都千代田区猿楽町
二の五の四郵便番号一〇一
一
振替東京一七八二二三 | 電
話(二九四)八七三一(代) ●
印刷所 | 明和印刷株式会社

書籍コード 109530394438

女流作家論

奥野健男

小説は本質的に女性のものか

女流作家論
目次

小説は本質的に女性のものか

〈対談〉 緑蔭閑話（野上弥生子・奥野健男）

野上弥生子

宇野 千代

網野 菊

森 茉莉

佐多 稻子

幸田 文

円地 文子

平林たい子

田中 澄江

9

16

30

38

52

58

64

97

103

146

157

瀬戸内晴美

河野多恵子

竹西 寛子

有吉佐和子

曾野 綾子

倉橋由美子

津島 佑子

〈対談〉「生き物の集まる家」をめぐって（津島佑子・奥野健男）

なぜ小説は女性に向いているか

あとがき

165

172

180

188

200

214

244

249

258

262

装幀 宮脇愛子

女流作家論——小説は本質的に女性のものか

小説は本質的に女性のものか

この頃の日本文学の様相を眺めると、文学、特に小説は、どうやら女性のものになりつつあるという感が深い。今年（昭和四十九年）数えで九十歳、武者小路実篤と共に文壇最長老の野上弥生子は、昨年文化勲章を受けた後も少しも老いを感じさせない長篇小説を営々と書き続けているし、八十歳を超えた島本久恵も大長篇「長流」に続いて長篇「貴族」を完成したし、一昨々年の芸術院恩賜賞に故平林たい子、芸術院賞に宇野千代、文壇のもっとも権威ある野間文芸賞に佐多稲子等と長老的女流作家の受賞があいつぎ、円地文子は「源氏物語」の現代訳を完成した。中堅の芝木好子、大原富枝らも地味ながら物語りづくりに飽くことなく精を出しているし、有吉佐和子は一昨年出版界空前絶後の超ベスト・セラー「恍惚の人」を書下し話題をさらった。曾野綾子、瀬戸内晴美、河野多恵子、佐藤愛子、平岩弓枝、戸川昌子、倉橋由美子、大庭みな子、金井美恵子らも、それぞれの分野、それぞれの意味で相変らず花形だし、盗作云々で作家的生命を断れたかに見えた山崎豊子も復活し居直って活躍している。富岡多恵子、吉行理恵ら詩人もユニークな小説を発表し、新潮社の新鋭書下し叢書では、続けて出た高橋たか子の「空の果てまで」と津島佑子の「生き物の集まる家」、三枝和子の「乱反射」

と二女流新人の作品が目立つ。そして芥川賞は郷静子、山本道子の女流が独占し、太宰治賞には本格的な新人と絶讃されて宮尾登美子が「權」で登場し、「旅の重さ」の素九鬼子が覆面を脱ぐ。女性の進出し難かった評論でも竹西寛子が「和泉式部」で平林たい子賞を受賞し、田中美代子という新人評論家もあらわれ、ノンフィクションにも、石牟礼道子、山崎朋子、桐島洋子、などの新人があらわれる。

このように思いつくまま列挙しただけでも、女性の活躍は目を見はるものがある。特に小説の新人の登場、活躍は、男性をしのぐほどである。かつては話題を呼ぶユニークな本格的な新人と言えば、石原慎太郎や大江健三郎や福田章二（庄司薫）のような若い学生作家であったが、近頃は十代、二十代前半の新世代を代表するような若い颯爽たる新人の出現はたえてない。三十代、四十代の戦争体験のある中年が多く、更には六十歳の森敦のような老大家的な新人まで出現するありさまで、ここでは主婦作家の重い生活体験をもとにした、しかも古典的教養もある手織り木綿的な手がたい物語り作品が、男性の観念的作品にくらべ、群を抜いて目立つ。しかも女性には少数ではあるが、金井美恵子、津島佑子、島さち子のような若い前衛的な新人も登場している。今や小説は、若い世代の男性には、何の魅力も関心もない存在になってしまったらしい。アングラ芝居はやりロックやホームソングは作詞作曲し歌い、漫画劇画は読み、つくり、ポップアートやデザインや踊りで自己表現し、そして全共闘でゲバリ、長髪や珍奇なモードでまたヒッピー化で自己顕示するが、小説はどうも苦手だというのが、今日の若者特に男の子の心情らしい。女の子とて、大半はその例にもれないが、それでも文学、小説に憧れを抱き、本能的に親近感をおぼえる若い女性はまだ多い。そして中年の主婦は、何と言っても小説好きである。

徳川時代、小説(戯作)は士大夫の読むべきものではなく「婦女童蒙の玩弄物」と看做されて来た。ところが西洋近代文明の輸入と共に、西洋においては、小説を中心に文学が、きわめて高い文化的、芸術的、社会的地位をもっていることがわかり、進取の血に燃える、主に地方出身の青年男子によって、文明開化、人間性と自由尊重、前近代的な現実曝露、真実追究の最大の具として、文学、小説が争って書かれた。それ以後、さまざまな屈折や発展を経ながら、戦後も六〇年安保闘争時代ぐらゐまで、小説はあらゆる芸術に冠たる、万能、総合の最高のジャンルであり、思想、宗教、政治、革命、社会、人間変革まで一切を含む男の仕事として、尚ばれ、敬われていた。事実、政治と文学はきわめて密接な関係にあり、文学者も文学読者も小説というドストエフスキ、トルストイ、バルザック、スタンダール、トーマス・マン、そしてサルトルなどの大小説を理想にしていた。小説は文化の中核であり、最先端の思想的表現とされた。しかし今や小説に対する男性のそのような期待や尊敬は薄れ(若い男性が長髪女性化したにもかかわらず)徳川時代のように婦女のものにもどりつつあるように思える。何となく、若い男性が小説に夢中になる、まして小説家を志望するということが羞しい時代になって来た。大学の文学部の学生の大半が女性に占められている中で男性が文学部に行くのが恥しいごとく、男が小説にうつつを抜かすことが恥しくなってきた。料理や裁縫や美容や家事や育児や教育などが圧倒的に女性の領域でありながら、真の専門家、プロ、名人は男性であるというような関係に、小説もなってきた感じである。

考えて見ると外国はいざ知らず、わが日本においては、古事記の時代から、伝承物語、日記の語り手、書き手、読み手は女性であった。「古事記」の稗田阿礼には語り部の姑おうなという女性的印象が浮んで

くるし、はじめて仮名日記を書いた「土佐日記」の作者紀貫之は「男もすなる日記というものを、女もしてみんとてするなり」と男性であるにかかわらず、女性を装って書く。ここに女性の方が、自由に日常のあるいはローマンの心情が書けるという認識がある。そして世界最初の長篇小説紫式部の「源氏物語」はじめ、女性の手により感覚、心理こまやかな王朝文学が花咲く。以来日本では、小説は婦女を中心とするものという觀念が行きわたり、江戸の戯作者は男たちだが、専ら女性と恋を書き、女性相手に小説を書いて来た。

太宰治は戦後、人類、猿類なんていう分類は間違いで、ほんとは「男類、女類、猿類」で、女は人類ではないと主張した「女類」という小説を書き、女性の不可解さを強調したが、その太宰の秀作は「女生徒」「千代女」「皮膚と心」「きりぎりす」「待つ」「ヴィヨンの妻」そして「斜陽」と、作者が女性と化し、女性の一人称で書かれたものが多い。いかに不可解であろうが、細かい微妙な感覚や心理や日常生活を表現するためには、女性の立場、女性の目を持った方がディテールまで十全に、自由に表現することができることを知っていたのだ。男性なのに女性に仮託して書く、これは「土佐日記」の紀貫之と同じである。どうも女性の方が本質的に小説表現に適しているのではないか。少くとも大政治や大思想などと直接かかわることの少ない日本の小説は女性のもものと言ってもよいのではないか。

考えてみると明治以来の日本の近代小説もその本質は女性的であった。自然主義、そして私小説の発想は、現実曝露、真実追究、文学修行、うそを書かない、生活報告、文学と実生活の一致、求道、反逆、放浪、破戒等々と言っても、根本は受身的であり、ぐちっぼく、他人をやっかみ、我が身の不幸を嘆き、捨てられた恋人に未練がましく、のぞき見的、井戸端會議的で、ずいぶんと女々しいもの

であった。自然主義文学者は地方出のいかつい書生であったから女性的とは遠いように錯覚されるが、「破戒」の丑松の歎きや行動にしろ、「蒲団」の未練がまじさにしろ、秋声、白鳥、秋江らも揃って女性的陰気さ、しつっこさ、猜疑心、やつかみなどを持っている。近代小説の祖、二葉亭四迷が負け犬的、女性的主人公内海文三を主人公にした「浮雲」を中絶し、文学は男子一生の事業に足り得るか悩んだのは、こういう小説を書くことにより自分が女性的になることをいさぎよしとしなかったためとも言えよう。硯友社の紅葉、鏡花らも女性的であり、漱石も「倫敦塔」や「道草」を読むとかなり女性的ヒステリー的であるし、荷風や潤一郎は好んで女性的感性に溺れようとしたし、有島武郎も決して男性的と言えない。白樺派の武者小路実篤や志賀直哉は男性的と言えるが、直哉の亭主関白的であるが生理的倫理観、ヒステリックな怒りははたして男性的と言えようか。家父長的家族道德観の枠に支えられていただけで、こんな亭主のかんしゃく持の身勝手な目や表現より、むしろ弱者の女性的な目に徹しようとしたのが芥川龍之介であり、高見順、太宰治、伊藤整などの昭和十年代作家ではなかったか。

今や谷崎潤一郎、室生犀星、川端康成のように女ひとの不思議さをあくまでみつめ、その美しさを表現することに生涯を賭けた文学者はいなくなった。つまり女流文学者をしのぐような女性の専門家である男性文学者はいなくなった。

戦中そして戦後、男性原理が日本の社会を支配した。戦争期は言わずもがな、戦後は社会革命、民主主義、政治へのコミットメント、組織と人間の問題、経済復興等々、小説は政治、思想、道徳、冒険、革命等、いわゆる男性原理、パブリックな男の社会をモチーフに出来た。これらは小説の大きな

枠組になり、その中でさまざまな微妙な心理感覚、日常生活を、幻想を扱い得た。

しかし六〇年安保、そして七〇年への大学紛争あたりを境い目に、男性原理は全く地に墮ちた。誰も革命や政治や戦争や道徳や人類の進歩などという理想を希望を信じなくなった。とうに家父長的倫理も権威を失っている。経済成長も技術開発の冒険も今や公害として罪悪視されている。新しい小説の枠組み、男性原理は見つからない。おぼろげに浮んで来るのは終末の思想ばかりだ。

こうなると男流作家はみじめである。男性原理の枠のないところでただ日常性や心理や感覚や幻想だけで小説を書かねばならぬ。野心的、良心的な作家であればあるほど、何をどう書くかに深刻に悩んでいる。

本来、生理的肉体的感覚は男性より女性がより豊かで深い。そこからの幻想やイメージもより鮮やかで華やかである。タブーの喪失した今日、彼女らの自由さ、奔放な発展はとどまることを知らない。イメージの氾濫の中をハレンチなまでゆうゆう泳いでいる。とても男の及ぶところではない。

しかし女は昔から物語りを語る能力にめぐまれている。男流作家がもう書く何もものもない、ただ身をおよぼしてしぼり出し一寸先の暗闇の中で苦闘しているのに、女流作家は、物語が泉のごとく湧き、どれから書いていいか迷うほどだと意気揚々である。

よくには女性には体当り的な夢中の強さはあるが、自己をつきはなし、客観化し、さらには戯画化する批評的、諷刺的、戯作的能力はないと思っていたが、倉橋由美子、河野多恵子、津島佑子など燃えながらも醒めた理知的な流作家も生れて来た。とすると日本の小説は女性の持つ豊富な生理感覚、幻想、女房的リアリズム、物語り性、そして諷刺性により、近い将来、女性の占有物になるのではな

いだろうか。今日は女流文学賞などまだあるが、近いうち稀少価値として男流文学賞でもつくらねばならなくなるのではないか。さまざまな徴候を調べれば調べるほど、冗談ではなく日本の小説の主流は女性のものになることは確実のように思える。またこれが自然の成行きなのかも知れない。